

英語コーパス学会第11回大会

日時 1998年4月18日(土)

会場 大手前女子短期大学(兵庫県伊丹市稲野町2-2-2) Bホール

1. 阪急電鉄神戸線塚口駅にて伊丹線に乗換え 「稲野駅」下車 東へ徒歩2分

2. JR宝塚線<福知山線>「猪名寺駅」下車 西へ徒歩7分

ワークショップ 10:30-12:10 OA演習室 梗概

《双方向型コンコーダンスソフト TXTANA を使ったコーパス検索》

講師 赤瀬川史朗

先着 30名(予定) 参加費 会員無料・非会員1,000円

(申し込みは電子メール・FAX・郵便で事務局まで)

受付開始 12:30

開会 13:00

1. 会長挨拶 姫路獨協大学 齊藤 俊雄

2. 総会

3. その他

研究発表 13:30-14:50

1. 「everybody/everyone を受ける代名詞について」 梗概

奈良女子大学大学院生 村田

和代

司会 徳島大学 田中 廣明

2. 「付加文——COBUILD Direct 利用の一研究」 梗概

追手門学院大学 稲木 昭子

司会 京都外国語大学 赤野

一郎

〈休憩 14:50-15:05〉

シンポジウム 15:05-17:30

《コーパスと辞書編集》 司会 大阪女子大学 南出 康世 梗概

「コーパスと1言語辞典——EFL/ESL 辞典を中心として」 講師 龍谷大学 正保 富三
梗概

「コーパスと2言語辞典——英和辞典を中心として」 講師 島根大学 井上 永幸 梗
概

「コーパスと2言語辞典——ハイブリッド方式採用の和英辞典を中心として」

講師 大修館書店 飯塚 利昭 梗概

閉会の辞
道信

大手前女子短期大学 西村

《懇親会 17:40-19:30 大手前女子短期大学教授会室 会費 4,000 円》

英語コーパス学会 (Japan Association for English Corpus Studies)

会長 齊藤俊雄 事務局 657-8501 神戸市灘区鶴甲 1-2-1 神戸大学国際文化学部 西村

秀夫研究室

TEL/FAX 078-803-0737 E-mail: (E-mail address deleted) 郵便振替口座 00940-5-250586

URL [../index.html](#)

◆大会当日、入会受付もいたしますので、お誘い合わせの上ご参加下さい（年会費 一般 4,000 円 学生 3,000 円）。また「当日会員」としての参加も受け付けております(1,000 円)。

英語コーパス学会第 11 回大会レジュメ

◆ワークショップ

《双方向型コンコーダンスソフト TXTANA を使ったコーパス検索》 講師 赤瀬川史朗

今回のワークショップでは、去年の夏に公開された Windows 95 対応のコーパス検索・分析ソフト TXTANA の実習を行います。本ソフトは高度な検索・分析が、どなたにでも容易にできることを目的に開発されました。コーパス検索に必須の、KWIC コンコーダンスとその並び替え、元ファイル参照、絞り込み、コロケーション統計などの機能のほか、他の検索ソフトにはないユニークな用例抽出・分析の機能が搭載されています。

また、容易なコーパス指定、シノニム辞書による検索式の簡略化、正規表現の入力支援機能、統一されたインターフェースなど、簡便性・操作性を重視しているのも大きな特長です。習得が難しいとされる正規表現については、オンヘルプ版の事例集を用意し、ユーザの便宜を図っています。

実習では、コーパスファイルの設定、シノニム辞書を使った検索式・検索条件の指定から、KWIC コンコーダンスの検索結果の評価、用例抽出の方法までを取り上げます。

コーパスには、MicroConcord Collection、Project Gutenberg を使用します。時間が許せば古英語コーパスの検索についても触れます。(古英語用の付属ユーティリティ OE Corpus Conversion Utility を使えば、代替文字を使っているテキスト・ファイルを古英語のアルファベットに変換し、TXTANA で検索できます。)

出席者には検索事例集付きのデモ版(100件まで検索可能、登録次第正規版となります)を配布します。アシスタントには、当初よりモニタとして開発に協力された西村公正・岡田啓の両氏を予定しています。なお、TXTANA の最新版および最新情報は、<http://biwa.or.jp/~aka-san/index.html> で入手できます。シェアウェアで登録料は¥3,800です。

◆研究発表

●everybody/everyone を受ける代名詞について 村田和代

三人称不定代名詞に呼応する代名詞は、従来の he から he/she や they へ移行する傾向が

みられる。本発表では特に everybody/everyone とこれらに呼応する代名詞に着目し、規範文法の立場でどのように扱われてきたかを通時的に概観するとともに英英辞典や語法書における記述の変遷についても考察する。そして代名詞の変化はいつ頃、どのような影響下でおこったのかを記述の推移から考えていきたい。さらに、文法書や辞書等から得られた結果が実際に使用されている英語に反映されているかについて、コーパスを利用して検証する。通時的な変遷は OED2-CD、1960年代は LOB Corpus[イギリス英語]・BROWN Corpus[アメリカ英語]、1980年以降は(MicroConcord Corpus Collection B[イギリス英語]・KUFUS Corpus (京都外国語大学) [アメリカ英語] を分析する予定である。実際に研究にコーパスを利用することにより、その有効性と問題点もあわせて考えていきたい。

●付加文——COBUILDDirect 利用の一研究 稲木昭子

付加文(Tag Sentences)の形式を、'RC (reference clause), T(tag)?'と表記すると、一般的にこの RC は平叙文あるいは命令文であるが、疑問文、感嘆文も可能であるとされている。また RC と T の肯定・否定の極性が逆の場合を Rp(reversed polarity)、一致する場合を Cp(constant polarity)と略記すると、Rp では、RC と T に肯定・否定、否定・肯定の二通りの関係が、Cp では肯定・肯定の場合が認められるが、否定・否定は疑問視されている。

この付加文が実際にどのような形で使用されているのかを、T の部分を検索項目として COBUILDDirect で調べ、その抽出結果を言語処理プログラムの WordSmith で処理し、付加文の用例を選択する。用例結果を四つの点から検討することにする。まず各検索項目のコーパス別の頻度数から、付加文そのものの使用における英・米語の差、ジャンル別の表出を検討し、次に RC の方に注目して、RC の文の種類および RC と後続する T の意味論的・語用論的關係を考える。次に T の部分から、法助動詞の場合を検討し、さらに RC と T の肯定・否定の極性の分布から、特に Cp の特異性をとりあげる。

◆シンポジウム《コーパスと辞書編集》

司会 南出康世

コンピュータ・コーパスの出現は「語彙と文法は共選択(co-selection)の関係にある」「直観と内省に基づくデータはテクノロジー的確率(technological probability)から再評価されるべきである」「レマ(lemma)の異形と異語義はそれぞれ独自の型を持つ」「語の意味と型はその仲間から帰納される」といった発想を現実的なものとし、Firth-Halliday の理論を具

現化することに貢献したとされる。辞書分野でこれを最も顕著に反映しているのが、英国の1言語学習辞典である。

2言語辞典、とりわけ英和辞典もこの影響下であり、コーパスの必要性が認識されつつあるが、LOB, Brown など既存のコーパスが英和辞典編集にさほど有用であるとは思われない。1言語辞典との基本的相違を再認識した上で独自のコーパスの構築を考える必要がある。

またテクノロジーの発達で L2-L1 辞典をコーパスに L1-L2 辞典を作ることを可能にした。LDOCE をベースにして Lexicon が作られた例を我々は知っている。しかし今回取り上げる辞書は、方法論的にもこれとは一線を画する辞書とってよいだろう。

以上コーパスとコンピュータ編集の観点から 1 言語 / 2 言語辞典の今後を考えてみたい。

● 「コーパスと 1 言語辞典——EFL/ESL 辞典を中心として」 正保富三

現在の EFL/ESL 辞典はすべてコーパスを利用して編纂されるようになった。その中で COBUILD と OALD, LDOCE, CIDE の大きな違いは、COBUILD の用例はコーパスで得られた文に忠実に従っていて、それ以外の辞書はコーパスから得られた例を利用して作られたものが多いように見えるということ、それと COBUILD の意味の配列が品詞別ではなく、語義を中心にして並べられているという点である。この利点とマイナスの点、さらにそのほかの諸問題を考えてみたい。

● 「コーパスと 2 言語辞典——英和辞典を中心として」 (井上永幸) 英和辞典の編集に電子テキストを使った例は過去にいくつかあるが、いずれも用例採取を主要目的として用いられており、本格的なコーパスに基づく英和辞典は未だ登場していないと言ってよい。発表者は既存のコーパスを使いながら、機会あるごとに辞書編集におけるコーパスの有用性についてふれてきた。2 言語辞典の編集にあたっては起点言語(source language)だけでなく、目標言語(target language)や当該辞書の想定使用者がおかれた状況をも考慮に入れたコーパス構築が必要となってくる。わが国では、コーパス構築、とりわけ辞書編集を目的としたコーパス構築に関する議論は、企業秘密的な側面もあり公にはほとんど行なわれていないのが現状である。

本発表では、2 言語辞典、特に日本語を母国語とする使用者のための英和辞典を編集すべく、コーパス構築にまつわる問題点について議論してゆく。

● 「コーパスと 2 言語辞典——ハイブリッド方式採用の和英辞典を中心として」 飯塚利昭

新しい方法による辞書編集の一例として、『ジーニアス和英辞典』(以下G和英)の編集・出版の現場からの報告をしたい。『電子ブック版 ジーニアス英和』には簡単な和英インデックス(入力した日本語を訳語として含む単語を検索する)がついているが、これを拡充して「G英和を日本語から引く辞典」を作れば、和英辞典としても役に立つものになるのではないかと考えたのが、G和英の「ハイブリッド方式」の始まりだった。基礎作業は、G英和を語義番号ごとにばらばらにした全文テキストファイルを元にして、パソコン上で進めた。

実際には、日本語の単語という単位の問題、派生語・複合語・慣用句等の関係、語義区分の困難などの問題のほか、G英和にない語・例の追加、全体のまとめなどに多くの労力を要した。その一端を報告して和英辞典のコーパスを考える一助としたい。